

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00626

研究課題名(和文) 中東少数派の音文化に関する研究—共有と非共有に着目して—

研究課題名(英文) A Research on musical culture among Middle Eastern Minorities

研究代表者

飯野 りさ (IINO, LISA)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：80758756

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は中東地域に居住する少数派の音文化を「共有と非共有」をキーワードとして明らかにすることを目的とし、2018年度から五年間行われた。研究の柱は二つあり、渡航調査などを含めた各研究者の個別研究と、中東から演奏家/研究者を招へいして国内で開催されたレクチャー・コンサートである。後者はアラブ、シリア正教徒、アレヴィー、クルド人の音楽をめぐる四期実施し、研究分析のための主要な資料を得ることができた。前者に関してはコロナ禍という制約もあったが、音楽的に共有されている特徴とその一方で独自性ある部分に関して分析し、現在、概略をまとめる段階に至っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究での主だった対象は、トルコのアレヴィーやシリア正教徒、トルコやイランのクルド人などの音文化であり、これまで関係諸国においては諸事情により必ずしも研究が進展していなかった。特にクルド人とシリア正教徒に関しては国内で学術的にもかつ一般向けにも紹介されることも説明されることもほとんどなかったゆえに、彼らの音文化に肉薄できたことは学術的にもそして社会的にもその意義は大きいといえる。特にクルド音楽に関しては、この数年の国内でのクルド人難民問題への社会の関心の高まりにも寄り添う形にもなったことは意義深かった。

研究成果の概要(英文)：This research project deals with musical cultures of Middle Eastern Minorities with a focus on the shared and the original. It lasted from 2018 to 2022 with some pause during the Corona pandemic period. The project had two main activities; first lecture-concert series by musician/researchers invited from the Middle East, which gave rise to attention for these musics from the Middle East by not only academics but also non-academics in Japan. The member researcher's field studies also brought some light on musical cultures on the targeted groups and analysis on the shared/original concept for this project.

研究分野：民族音楽学

キーワード：中東 音楽 少数派 音文化 クルド

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、中東地域に住む少数派の音文化に関する研究である。中東の音楽に関する研究は国内でもある程度の蓄積があるものの、他の研究と同様にこれまでは国別に行われてきた。ゆえに各国家の主流派である民族・社会集団の音楽の研究が主であったといえる。その一方で、各国に居住する少数派に関しては、各国の政治・社会・文化に関する政策から、一部集団に関してはその集団の人口の希少さなどの諸事情から研究が進んでいなかった。しかしながら、1990年代にはイラク国内でクルド人による暫定的な自治が始まり、トルコでも EU との関係などから少数派の言語や文化に関する権利が認められ始めるなど変化の兆しが見え始めた。そうした動きは2010年代に徐々に大きくなっていく。本研究はそうした状況の変化を鑑みて開始された研究である。

### 2. 研究の目的

本研究は中東の少数派、特にイラン・イラク・シリア・トルコの国境が重複する地域クルディスタンに住む人々、その中でもクルドとアレヴィー、そしてシリア正教徒の音文化を「共有と非共有」をキーワードとしてアラブ、イラン、トルコの音楽研究者が分析・考察することを目的とした。この地域は政治的な問題から程度の差こそあれ直接調査することが現在でも困難である一方で、中東の文化的な重層性はこの地域にも顕著であり、音文化に関しても同様である。ゆえに各研究者がこれまでに培った知識と経験をもとに、まずは共有する特徴としない特徴を明らかにしていくことで各少数派の音楽研究を深めるとともに、この地域全体の音文化に関する研究の深化を図ることがこの研究の目的である。

### 3. 研究の方法

本研究はイラン、トルコ、アラブ諸国でこれまで調査研究を行ってきた三名の研究者が、中東少数派の音文化の解明を目的とした研究で、2021年度・22年度（令和3年度・4年度）は中央アジアの音楽研究者も参加し、コロナ禍の中、最終年度の研究を行った。研究方法としては第一にメンバーの海外渡航調査、第二に研究対象である音楽の演奏家・研究者を招へいしての国内でのレクチャー・コンサート開催で、この二つが大きな柱となってきた。それ以外にも、年に一度の研究会で情報・知識の共有を行い、この地域の音文化の全体像の構築につなげた。

### 4. 研究成果

本研究は、平成30年度（2018年度）から令和4年度（22年度）までの五年間に渡り行われた。もともとは令和3年度までの四年間を予定していたが、コロナ禍により終了を一年延長した。多くの人々と同様に「コロナ禍」は想定外であったが、それにさらに状況を難しくしたのがイラン情勢などにみる中東全体の不安定化であり、2017年の申請時には比較的良好であった国際情勢が徐々に再度悪化していった感は否めない。しかしながら海外情勢が変化する一方で、国内では埼玉県に居住するクルド人難民に関する関心が高まりを見せ、本研究にとり予期せぬポジティブな効果をもたらしている。

本科研の二つの柱の一つであるレクチャー・コンサートは、研究者から一般人まで幅広い層の人々の関心と呼び大きな意味があったといえる。第一回目はアラブ（シリア北部、アレppo）、第二回目はシリア正教徒（トルコ南東部、マルディン県）、第三回目はアレヴィー（トルコ南東部、出演者の出身はカハラマン・マラシュ県）、第四回目はクルド（トルコ南東部、出演者の出身はハッカリ県）。当初はイラン系のクルド人演奏家の招へいを想定していたが、昨今のイラン情勢などの難しい問題がある一方で、クルド語・文化のトルコ国内での関心の高まりから最終年度にクルド音楽に関するレクチャー・コンサートが実現した。

各人の渡航調査に関して言えば、米山がオーストラリア、飯野がスウェーデンで主に調査を行うことができたものの、2020年からのコロナ禍による制約は調査方法の試行錯誤などで調査の遅延をもたらした。その一方で、それまでの成果は第三回中東音文化研究会（2021年1月）での研究発表や文化人類学会大会（2021年5月）での発表などで披露されている。そうした発表からは、各国での各集団の置かれた状況の違い等が、それぞれの集団がホスト社会との関係の中で音楽的な関係の再構築を行う様子や、文化的なアイデンティティの再構築に多大な影響を与えていることを明らかにした。このような社会文化的な状況に関する再確認ができた一方で、音楽実践の基底をなす部分の共通点も若干確認できた。たとえば、東田によるカザフ音楽の即興演奏教育に関する研究や、谷のライフワークであるイラン音楽の即興演奏の研究、そして飯野のアラブ音楽における旋法研究に派生する即興演奏の研究などで多くの共通点が見られた。本科研で得られた知見は論文集の形で発表する予定であるが、論文集には、科研参加者だけでなく関係する研究者にも論文ないしはエッセイなどの形で寄稿を呼びかける予定である。

各民族・各集団にはそれぞれに固有の音楽文化・音文化がある。それは正しい命題であるものの、その一方でその音楽システムや文化装置などに関しては共有し共通する要素も多いことは当事者同士も熟知していることで、本科研の五年間でそれはかなり明らかになりつつある。本科研の申請時の用語では「共有と非共有」として表現されている概念の輪郭がより明瞭になってきたといえる。各集団の関係は、各自がそれぞれの独自性を尊重しながらも、何からの点で共有するものもあり、接点もある、すなわち独立しているものの、時には重なりあったりする部分があり、それは時間軸（歴史）と空間軸（地理）で絡み合いながら進行していると言えるのではないか。英文学者で文化研究者として著名であったエドワード・サイードは、帝国主義の文化的に圧倒的で抑圧的な影響力を常に批判する一方で、むしろ文化的には「対位法 *contrapuntal*」的な関係の重要性をその著作で何度か披露している。むろんここでいう対位法とは音楽学的に厳密なものではなく、文化的な力関係に非対称性がある者／集団同士の関係を表現するための用語として選択されている。今日、身近な例ではSNSの隆盛にみるように、社会は、そして世界は多くの集団、ある意味で小宇宙の集まりが銀河を作っているような状況で、「主要で支配的」な文化は存在しても、それだけが世界を形成しているのではないことは明らかで、かつ、大宇宙も小宇宙もそれぞれに独立しつつも関連してそれぞれの状況下で進行している。本科研の成果として論文集では、中東のトルコ南東部やシリア北西部、イラク北東部、イラン北西部では以前からそうした状況が音文化においても顕著であったことを、文化的な対位法といった言葉をキーワードとして明らかにしたいと考えている。

以上

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 飯野りさ	4. 巻 65(1)
2. 論文標題 書評『Tala Jarjour著 Sense and Sadness: Syriac Chant in Aleppo (New York: Oxford University Press, 2018)』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽学	6. 最初と最後の頁 56-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷正人	4. 巻 42(4)
2. 論文標題 「打弦楽器をめぐる試行錯誤：インド・イランのサントゥール」、特集：旅する楽器	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 43-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷正人	4. 巻 43(2)
2. 論文標題 「イランの弦楽器サントゥール」、特集：南アジア、弦の響き	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷正人	4. 巻 44
2. 論文標題 「イラン音楽との出会い」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 紫明：芸術文化雑誌	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米山知子	4. 巻 42(4)
2. 論文標題 「撥弦楽器タンブールの多様な風景」、特集：旅する楽器	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米山知子	4. 巻 43(2)
2. 論文標題 「トルコでサズを奏でる日々」、特集：南アジア、弦の響き	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 飯野りさ	4. 巻 49
2. 論文標題 「東日本支部第106回定例研究会 部レクチャー・コンサート報告」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東日本支部だより	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 米山知子、東田範子、柚木かおり (代表)
2. 発表標題 民族的楽器のあり方：ユーラシアの有棹撥弦楽器を比較する
3. 学会等名 東洋音楽学会第70回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoko Yoneyama
2. 発表標題 Religious Symbol or Cultural Performance?: A Case Study of Turkish Alevi's Semah in Melbourne
3. 学会等名 18th International Conference on Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飯野りさ
2. 発表標題 研究報告「中東音文化における共有と非共有：この一年の調査で得た知見を中心に」
3. 学会等名 中東音文化研究会第2回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Lisa lino
2. 発表標題 "A Name of Mode: An Aleppine Case"
3. 学会等名 Seminar at the Department of Linguistics and Philology, Uppsala University
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 谷正人
2. 発表標題 「第三部：イラン音楽・芸術」でのイラン音楽の実演(サントゥール)と解説
3. 学会等名 「イラン文化との交流の歩み：イラン・イスラーム革命40周年記念シンポジウム」、龍谷大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷正人
2. 発表標題 講演「『民族音楽』からペルシャ文化を知る」
3. 学会等名 神戸映画サークル評議会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷正人
2. 発表標題 講演「サントゥールやイラン伝統音楽に関する講演」
3. 学会等名 『谷正人神戸大学准教授サントゥール演奏・講演会』、在イラン日本大使館（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷正人
2. 発表標題 研究発表「イラン音楽における記譜と創造的解釈、面状に配置された弦と対峙する身体」
3. 学会等名 シンポジウム『糸が紡ぐ音の世界』、京都市立芸術大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 谷正人
2. 発表標題 レクチャーコンサート「地球音楽を生きる：中東と日本をつなぐ楽器たち」での演奏、「総合討論」でのパネリスト
3. 学会等名 第35回人文機構シンポジウム『中東と日本をつなぐ音の道（サウンドロード）：音楽から地球社会の共生を考える』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯野りさ
2. 発表標題 研究発表「シリア正教徒共同体における世俗歌謡と民族感情：音楽表現にみる故郷のイメージ」
3. 学会等名 日本中東学会第34回大会、上智大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Iino, Lisa (飯野りさ)
2. 発表標題 conference paper "Syriac Music in Ethnomusicology: Towards a New Positioning as a Nation/Ethnic Group"
3. 学会等名 The Future of Syriac Studies and the Legacy of Sebastian P. Brock, Sigtuna, Sweden (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯野りさ
2. 発表標題 研究報告「中東少数派の音文化研究：アラブ音楽からの比較考察」
3. 学会等名 第1回中東音文化研究会、聖心女子大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯野りさ
2. 発表標題 レクチャー・コンサートにおける解説
3. 学会等名 レクチャー・コンサート『アレppoの伝統で学ぶアラブ旋法』、東京大学および神戸大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯野りさ
2. 発表標題 レクチャーコンサート「地球音楽を生きる：中東と日本をつなぐ楽器たち」でのファシリテーター
3. 学会等名 第35回人文機構シンポジウム『中東と日本をつなぐ音の道（サウンドロード）：音楽から地球社会の共生を考える』
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 米山知子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 208
3. 書名 「第 1 章第 8 節トルコ：セマーの宗教的意義と担い手たちの認識」『映像で学ぶ舞踊学』（遠藤保子監修、弓削田綾乃等編集）	

1. 著者名 米山知子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 276
3. 書名 「第8章 イスラームと芸術：『音楽』という視点から」、小杉泰・黒田賢治・ニツ山達朗（編）『大学生・社会人のためのイスラーム講座』	

1. 著者名 飯野りさ	4. 発行年 2018年
2. 出版社 スタイルノート	5. 総ページ数 158
3. 書名 アラブ音楽入門：アザーンから即興演奏まで	

1. 著者名 飯野りさ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 338
3. 書名 「第52章イラク北部からトルコ南東部の音楽：織られ続ける音のタペストリー」、山口昭彦編『クルド人を知るための55章』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本科研では、コロナ禍中であった2020年度を除き18年度・19年度・21年度・22年度と四期にわたりレクチャー・コンサート（以下LC）を開催した。LCは、中東から関係する演奏家／研究者を招へいし、東京と関西で彼らの演奏を中心にレクチャーも付加する形で行われた。本科研の関心地域（特にトルコ南東部とシリア北部）は1920年代に近代国家のトルコとシリアが誕生する以前はオスマン帝国の支配下にあり、主流な言語がトルコ語とアラビア語という言語の違いはあるものの文化的・経済的な交流があり、シリアの古都アレppoはその玄関のひとつであった。そうした歴史的背景から第1回目のLCはシリアの古都アレppoを代表するウード奏者で伝承歌謡の師匠であるムハンマド・カドリー・ダラール氏を招いて行われた。第二回はトルコ南東部のマルディン県トゥール・アブディーン地方を民族的故郷としているシリア正教徒の演奏家を移民先のスウェーデンから招へいした。どちらの場合もレクチャーに関しては飯野が担当した。21年度はトルコの少数派のひとつであるアレヴィー教徒の音楽研究者でかつ演奏家としても著名なウラシュ・オズデミル氏によるアレヴィーに関するレクチャーを第一部、それに続き第二部としてコンサートをオンライン録画をお願いした。22年度は対面に戻り、トルコ南東部ハッカリ出身の演奏家で研究者でもあるセルダル・ジャーナン氏に、第一部レクチャーと第二部のコンサートの両方をお願いした。22年度分に関しては長野県松本市で信州イスラーム世界勉強会の協力を得てLCが開催され、関西では神戸大学で行われている。一連のLCは学術研究であるが、その一方でコンサートという形態ゆえに一般の参加者も多かった。対面で行った18年度・19年度・22年度は収容人数いっぱい（50名ほどの場合と100名ほどの場合あり）参加者が集まり、アウトリーチ活動としての成果も大きかったといえる。

#### 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	谷 正人 (TANI MASATO)  (20449622)	神戸大学・人間発達環境学研究所・准教授  (14501)	
研究分担者	米山 知子 (YONEYAMA TOMOKO)  (50511127)	関西学院大学・国際学部・研究員  (34504)	
研究分担者	東田 範子 (TODA NORIKO)  (40904587)	東京藝術大学・音楽学部・研究員  (12606)	

#### 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------